

ドイツ語史におけるシュタウフェン朝 宮廷詩人語の位置づけについて

須 沢 通

1 新高ドイツ語文章語成立の過程を、カロリング朝宮廷語からザクセン朝、ザリエル朝、シュタウフェン朝の宮廷語およびブラハのルクセンブルク家の官庁語を経て、ハプスブルク家のウィーン官庁語とヴェティーン家のマイセン官庁語に至る歴代皇帝庁書房の伝統の中に連続的に描こうとした K. Müllenhoff (1863)¹⁾の試みが挫折して以来、シュタウフェン朝宮廷詩人語を基礎とする中高ドイツ語と新高ドイツ語文章語の間に継続的な発展過程をみようとする研究方向も意味を失ったものと考えられている。この新高ドイツ語標準語の発祥の地を求めたドイツ語史研究は、その後 Müllenhoff のテーゼに基づいて、14世紀のカール四世のブラハ皇帝庁からヴェティーン家の官庁語への連続性を説いた K. Burdach (1893)²⁾のテーゼと、これら上から下への発展方向を否定し、東部開拓地における移住者たちの方言の混濁と言語平均化を示すことで、下から上への発展方向を説いた Th. Frings (1936)³⁾のテーゼを生んだが、これらの学説も否定され、あるいは否定的にみられて、今日では一般的に、新高ドイツ語標準語の単一の「揺籃の地」は存在せず、標準語の成立過程には初期新高ドイツ語期の多くの地域的共通語が関与したものと考えられている⁴⁾。この関与において特に積極的な役割を果たしたものが、東上部ドイツ語および東中部ドイツ語である⁵⁾。このような現状から、ドイツ語史に関する研究の関心は今日では専ら初期新高ドイツ語に向けられ、この領域をテーマに数多くの研究成果が発表されている。

これに対して最近の P. v. Polenz (1991) の研究⁶⁾は、S. Sonderegger (1979)⁷⁾に基づいて、新高ドイツ語標準語成立の過程を中世のドイツ語からの連続性と非連続性の視点からとらえようと試みた。しかし彼もまた、両者における政治的、文化的、言語的 Prestige の移行に加えて、一方は言語体系の「超特殊化」(Überdifferenziertheit) で、他方はその「単純化」(Vereinfachung)、「体系化」(Systematisierung) で特徴づけられる中高ドイツ語と初期新高ドイツ語の間には、根本的な非連続性が存在するという基本的態度を崩していない。

ドイツ語史において超地域的な言語の確立を目指した最初の真剣な試みとしてのシュタウフェン朝宮廷詩人語の存在について初めて言及したのは J. Grimm (1819)⁸⁾であった。その後、この中世盛期における統一的文学語の存否をめぐる、種々様々な議論が展開されたが、今日までの研究は、この宮廷詩人語を「否定的選別」(negative Auslese) により成立した人造語 (Kunstsprache)⁹⁾、あるいは特定の社会層における文学的コミュニケーション手段のための機能語 (Funktiolekt)¹⁰⁾と性格づけ、ここにシュタウフェン家のアレマン方言を Prestige とした超地域的文章語、もしくは文学的共通語の傾向を認めている。しかしシュタウフェン朝の崩壊、それにともなる騎士文学の衰退とともに、この共通語への傾向の芽もしばみ、結局この宮廷詩人語がその後の新高ドイツ語文章語の成立過程に連続することはなかったとして、この時代をその後の中核のない言語多様化の時代、それに続く主要な領邦国家

を中心とする地域的共通語の成立にいたる時代と対立させるのが今日の一般的な方向である¹¹⁾。

2 中世宮廷文学はそのほとんどが韻文によるものである。これは言語体系を調べるうえで障害になる場合も多いが、中世文学作品のほとんどにおいて原本文が伝来せず、したがって伝承された写本からの校訂テキストに頼らざるを得ない中高ドイツ語研究においては、押韻語、押韻形を調査することで詩人の使用した音韻、語形をより正確に知ることも可能となる。このような事情から、シュタウフェン朝宮廷詩人語が超地域的言語を目指したことを示す最大の根拠も、各詩人が同一の押韻を目指したこと、すなわち地方によって音の異なる不純な韻を避けたことに置かれている¹²⁾。以下の表は、シュタウフェン朝の宮廷詩人たちにおいて、方言的色彩の強い音韻、語形を有する単語が押韻語として使用された用例の調査結果をまとめたものである¹³⁾。資料としては、アレマン語圏出身の二人の詩人、ハルトマン・フォン・アウエの「Erec」¹⁴⁾ (1180年頃) [表ではEと略記、以下同様]、「Iwein」¹⁵⁾ (1202年頃) [I]とゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの「Tristan」¹⁶⁾ (1210年頃) [T]、バイエルン・東部フランケン語圏に属するヴォルフラム・フォン・エッシェンバハの「Parzival」¹⁷⁾ (1205年頃) [P]、東中部ドイツ語圏出身のハインリヒ・フォン・モールンゲン (1150年頃～1222年)¹⁸⁾ [M]、アルザス出身ではあるがバイエルン語圏で活躍したラインマル・フォン・ハーゲナウ¹⁹⁾ (1160年頃～1205年頃) [R] およびバイエルン語圏出身のヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ²⁰⁾ (1170年頃～1230年頃) [W]、さらにバイエルン語圏のナイトハルト・フォン・ロイエンタール²¹⁾ (1180年頃～1245年頃) [N] の叙情詩、東部フランケン語圏のヴェルツブルク出身で、その後西中部ドイツ語圏の低地ライン地方からアレマン語圏の上部ライン地方で活躍したコンラート・フォン・ヴェルツブルクの短中編叙事詩のうち、低地ライン地方で書かれた「Das Turnier von Nantes」²²⁾ (1257年頃) [TN]、同時期か少し前に東部フランケン方言で書かれたと思われる「Der Schwanritter」²³⁾ [SR]、最近の研究で低地ライン時代の作の可能性が指摘されながらも成立時期と場所に関してなお議論の多い「Engelhard」²⁴⁾ [EH]、上部ライン地方へ移動した後の1260年代後半にシュトラースブルクで書かれた「Heinrich von Kempten」²⁵⁾ [HK]、1270年代後半以降の晩年の作でバーゼルで書かれた「Pantaleon」²⁶⁾ [PA] を利用した。表において、◎は用例が多く見られること、○は用例が見られること、△は用例がわずかしが見られないこと、×は用例が全く見られないことを、またKは用例のすべて、または大半が接続法であることを示す。

	E	I	T	P	M	R	W	N	TN	SR	EH	HK	PA
gân	◎	◎	◎	△	○	◎	◎	◎	×	○	◎	△	◎
gên	○K	○K	○K	◎	○	○K	○K	○K	×	×	△K	×	△K
stân	◎	◎	◎	△	○	◎	◎	◎	△	○	◎	○	◎
stên	○K	○K	○K	◎	○	○K	○K	○K	×	△K	△K	×	△K

gân, stân 形はアレマン方言、ラインフランケン方言で優勢であり、gên, stên 形はバイエ

ルン方言および中部ドイツ方言で一般的に用いられた²⁷⁾。表からは、押韻語としてはアレマン語圏、ラインフランケン語圏の詩人に限らずバイエルン語圏の詩人においても gân, stân 形が優勢であり、gên, stên 韻は主として接続法形として用いられたことをみることが出来る。しかし、バイエルン・東部フランケン語圏のヴォルフラムでは、押韻語としても自らの方言 gên, stên 形が広く用いられ、東中部ドイツ語圏のハインリヒ・フォン・モールゲンでは両方の形が併用された。

	E	I	T	P	M	R	W	N	TN	SR	EH	HK	PA
kam	◎	○	◎	×	×	×	×	△	×	×	◎	×	○
guam	×	×	×	○	×	×	×	△	○	○	×	○	△
kom	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

komen の過去形には3種類あり、kam 形はアレマン方言で用いられ、quam 形は中部ドイツ方言で、kom 形はバイエルン方言および東部フランケン方言で用いられた²⁸⁾。押韻では、アレマン語圏の詩人とコンラートのアレマン地方での作品が kam 韻を、ヴォルフラムおよびコンラートの低地ライン地方の作品が quam 韻を用いているのに対して、バイエルン語圏の叙情詩人とハインリヒ・フォン・モールゲンは地方によって異なる複雑なこの語形を押韻語に使用することを避けた。また kom 韻は上記の詩人において完全に避けられた。

	E	I	T	P	M	R	W	N	TN	SR	EH	HK	PA
hæte	◎K	△K	◎	△K	×	×	△K	△K	△	○	◎	△K	○
hâte	◎	×	×	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×
hête	×	×	×	△K	×	×	×	×	×	×	×	×	×
hete	×	×	×	×	×	×	×	×	×	○K	×	×	○

hân の過去形には実に多様な語形が見られ、上記の語形の他にも hatte, heite, hiete などがあった。このうち hæte はアレマン語圏、フランケン語圏の詩人によって、また hete, hiete はバイエルン方言で多く用いられたが、各方言が複数の語形を併用していた²⁹⁾。押韻語としては、上記の表に見られるように、アレマン語圏のゴットフリートとハルトマンの初期の作品「Erec」などで hæte 韻を中心とした押韻使用が目立つ以外、全体としては、この多様な語形の押韻での使用は避けられた。

	E	I	T	P	M	R	W	N	TN	SR	EH	HK	PA
gie	◎	○	◎	×	△	○	△	○	×	×	○	○	○
gienc	△	○	△	◎	×	×	×	×	○	△	△	×	×
lie	◎	○	◎	△	△	○	△	○	×	×	△	○	△
liez	○	○	○	◎	×	△	×	△	×	○	○	○	○

gân, gên の過去形 gienc は中部ドイツ方言で多く用いられたが、新語形で、短縮された語

形 *gie* は上部ドイツ方言で支配的であった³⁰⁾。*lân* の過去形 *liez* とその新語形 *lie* についても同様のことがいえる³¹⁾。押韻語としては、上部ドイツ語圏の詩人が新語形を優先させているのに対して、東部フランケン語的言語使用の特徴を示すヴォルフラムでは専ら旧来の完全形が用いられ、コンラートの低地ライン地方の作品でも完全形が使われた。また、アレマン語圏のハルトマンも、初期の作品では新しい短縮形を多用したのに、後期の作品では両形を併用している。

	E	I	T	P	M	R	W	N	TN	SR	EH	HK	PA
lît	○	○	○	△	△	○	○	○	×	△	○	○	×
liget	×	×	△	○	×	×	△	×	×	×	×	×	×
leit	○	◎	◎	○K	△	△	○	○	○	○	◎	○	◎
leget	×	×	×	○	×	×	△	×	×	×	×	×	×
treit	△	○	○	○K	△	×	△	◎	△	△	○	△	△
treget	×	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×
seit	◎	◎	◎	×	○	○	○	◎	○	○	◎	○	◎
saget	○	○	○	◎	×	○	○	○	×	×	○	×	○

ligen, *legen*, *tragen* および *sagen* の変化形 (er) *liget*, (er) *leget*, (er) *treget*, (er) *saget* には、完全形とともに、それぞれ (er) *lît*, (er) *leit*, (er) *treit*, (er) *seit* の縮約形(Kontraktion) も見られる³²⁾。この両形の押韻使用についてはこれまでの研究で、*seit* が中部ドイツ語圏で用いられなかった以外、縮約形が中部ドイツ語圏から上部ドイツ語圏の広い範囲で完全形を圧倒したことが明らかになっている³³⁾。上記の表からは、縮約形の押韻語としての優位性および、その中で完全形を優先させたヴォルフラムの押韻使用の特異性をみることができ。さらに表は、多くの詩人が優勢な *seit* 韻とともに *saget* 韻も併用したことをも示している。

以上の統計結果から次の点が明らかになった。 1) *gân*, *stân* と *gên*, *stên* のドイツ語圏を東西に二分する語形では、押韻語として、ヴォルフラム以外でアレマン方言の優位性をみることができる。しかしこの場合でも、他の語形を接続法形として併存させている。 2) 多様な語形を有する *komen* と *hân* の過去形においては、アレマン語圏のゴットフリート以外、ハルトマンの後期の作品も含めて多くの詩人が、これらの語形の押韻使用を避けた。

3) *gienc*, *liez* と *gie*, *lie* のドイツ語圏を中部、上部に二分する語形は、押韻語としてもそれぞれが、その地域の詩人によって優先的に用いられたが、アレマン語圏の詩人を中心に両形を併用する傾向もみられる。 4) *ligen*, *legen*, *tragen* の変化形では、ヴォルフラムを除き、押韻語として専ら縮約形が用いられた。*sagen* の変化形は、ヴォルフラムなど一部の詩人以外で、完全形と縮約形の両方が押韻語に用いられた。 5) ヴォルフラムとゴットフリートは、それぞれ中部ドイツ方言とアレマン方言の自分の方言色の濃い語形を押韻にも積極的に使用した。

この結果から、上記宮廷詩人たちの押韻使用と、またそれに対する姿勢に、アレマン方言

を Prestige とする統一性だけを、同時に「否定的選別」からなる共通性だけを求めることは不可能である。したがって彼らの言語表現に、このような押韻使用の統一性、共通性を根拠として「宮廷詩人語」という統一の名称を与えることは適当でないように思われる。ただ、これらの詩人たちが他の言語地域とその言語の存在を意識したこと、それが押韻という整合性が求められる詩作上の技法にそれぞれ反映したことは明らかであり、したがってここに一定の共通性を見出すことは可能である。

3 シュタウフェン朝宮廷詩人語の存否に関する問題と関連して、低地フランケン語圏のリンブルク出身の詩人ハインリヒ・フォン・フェルデケの「Eneit」³⁴⁾ (1185年頃)における言語使用についても、その超地域的傾向をめぐって長年論争がなされてきた。しかし今日では、フェルデケが「Eneit」で、当時すでに成立の過程にあった上部ドイツ方言を中心とした宮廷詩人語を考慮に入れ、低地ドイツ語的押韻語を避けて、高地ドイツ語的押韻語を用いたことが指摘され、ここに超地域的な文学的共通語への傾向を認めている³⁵⁾。これに対して、「Eneit」における押韻語の方言的特徴についての調査により、ここにリンブルク方言を中心とした低地および中部ドイツ方言の方言的色彩の強い多様にして数多い押韻形も確認されている³⁶⁾。

p : p (mhd. pf/p)=kamp : lamp (mhd. kampf~lamp), t : t (mhd. tz/z)=gehat : schat (mhd. gehaz~schatz), ch : ch (mhd. k/ch)=tach : gesach (mhd. tac~gesach), ouw : ouw (mhd. iuw/ouw)=frouwen : trouwen (mhd. vrouwen~triuwen), ht : ht (mhd. ft/ht)=kraht : naht (mhd. kraft~naht), v : v (mhd. b/v)=neve : geve (mhd. neve~gebe), û : û (mhd. iu/û)=hût : lût (mhd. hût~liut), â : â (mhd. æ/â) =wâne : âne (mhd. wæne~âne), ô : ô (mhd. œ/ô)=crône : schône (mhd. krône~schœne), s : s (mhd. s/hs)=was : antvas (mhd. was~antvash) u. a. m.

これらの押韻はいずれも、上部ドイツ方言を中心としたいわゆる標準的中高ドイツ語に置き換えると不純な韻を生むリンブルク方言もしくは低地、中部ドイツ方言の特徴を有している。この他「Eneit」には、リンブルク方言には見られない中部ドイツ方言の語形の押韻使用も見られる。

o : o (mhd. o/u)=wolde : holde (mhd. wolde~hulde ; limb. wolde~hulde), e : e (mhd. i/e)=erre : verre (mhd. irre~verre ; limb. irre~verre) u. a. m.

しかし同時に「Eneit」では、上記の例を除く多くの用例で、上部ドイツ方言を中心とする中高ドイツ語を考慮した押韻使用が見られる。例えば押韻語として好んで用いられた zît (mnd. tît, limb. tit)は, wît (mnd. wît, limb. wit), strît (mnd. strît, limb. strit) など中高ドイツ語に置き換えても韻を乱すことのない単語とは韻をふむが、リンブルク方言、低地ドイツ語の語形では韻を乱さなくとも中高ドイツ語に置き換えると不純な韻を生む wîz (mnd. wît, limb. wit), vlîz (mnd. vlît, limb. vlit) などとは結ばれることはなかった。また heiz (mnd. hêt, limb. heit) は weiz (mnd. wêt, limb. weit), sweiz (mnd. swêt, limb. sweit) とは結ばれても、押韻語として多くの用例をもつ gereit (mnd. gerêt, limb. gereit) とは結ばれることはなかった。やはり多くの押韻で用いられた rîten (mnd., limb. riden) は zîten

(mnd. tîden, limb. tiden), sîten (mnd., limb. siden) とは韻をふんだが, snîden (mnd., limb. sniden), lîden (mnd., limb. liden) とは結ばれることはなかった。いずれもリンブルク方言, 低地ドイツ方言では韻を乱すことはないが, 中高ドイツ語では韻を乱すことになるからである。逆に, 中高ドイツ語の語形では韻を乱さないものの, リンブルク方言, 低地ドイツ方言の語形に置き換えると韻を乱すものは, sprach: sach (mnd., limb. sprac~sach) などわずかな例に限られている。この点からもフェルデケが「Eneit」で彼のリンブルク方言および低地, 中部ドイツ方言を基礎とした押韻使用を行なったこと, 同時に上部ドイツ方言を中心とした中高ドイツ語をも強く意識し, この言語に置き換えても韻の乱れを生まない押韻使用をこころがけたことを確認することができる。このことは, 次の語形の「Eneit」における押韻使用の統計からも証明される。表の記号の意味は2. と同様である。

gân ◎ gên ○ stân ◎ stên ○

gên, stên 形はいずれも直説法現在3人称単数 gêt, stêt の形であらわれている。リンブルク方言および低地ドイツ方言の gan, stan は, 直説法現在3人称単数では geit, steit となるが³⁷⁾, 上記の用例では, gêt (16例) が2例で slêt (mnd., limb. sleit) と結びつくほかは, stêt (14例) と互いに韻を結び, 高地, 低地ドイツ語, さらにリンブルク方言いずれの語形に置き換えても韻を乱さない組み合わせとなっている。

guam ◎ hæte ×

komen のリンブルク方言, 低地ドイツ方言における過去形は guam で³⁸⁾, フェルデケは, 中高ドイツ語の中部ドイツ語圏を中心とした広い範囲でも用いられたこの語形を, 押韻語として多く利用している (188例)。これに対して, リンブルク方言, 低地ドイツ方言の heben (mhd. hân) の過去形 hadde³⁹⁾ は, 押韻語としては有用でなく, また中高ドイツ語でも多様な語形を持っていることから「Eneit」でも押韻使用からはずされた。

gienc ○ liez ○ saget △

リンブルク方言, 低地ドイツ方言では ginc, lit, seget となるこれらの単語のうち, saget だけが低地ドイツ方言で縮約形 seit を持つ⁴⁰⁾。しかしリンブルク方言ではこの単語の縮約形も存在しないことから, 上記のいずれの単語においても押韻語としては完全形が用いられている。

この他, liget (mnd., limb. liget), leget (mnd., limb. leget), treget (mnd., limb. dreget) の押韻使用に関しては, それぞれ1例もしくは数例の用例が見られるが, いずれも主要なテキストで語形, あるいは対となる押韻語が異なるため, フェルデケにおけるこれらの単語の押韻語形を知ることはできない。

以上の結果, フェルデケの「Eneit」における押韻使用に関しても, 彼が初期の作品とは

異なり、この後期の作品で、リンブルク、低地ドイツ語圏を超え、上部ドイツ地方を含む高地ドイツ語圏の広い地域とその言語をも強く意識したことが、これが彼の押韻使用にも反映したことが明らかになった。これらの点から、フェルデケおよび高地ドイツ語圏の宮廷詩人たちの関心が、超地域的な言語使用に向けられたことを認めることができる。しかしこの関心は限られた範囲でありながら漠然とした形であらわれ、ここから進む方向もまだ多岐にわたっていた。これらが鮮明な形をとり、さらに一定の方向を示すようになるのは、なお後の時代のことである。

4 初期新高ドイツ語の概念は1878年の W. Scherer⁴¹⁾の提唱に基づく。それ以来、ドイツ語史における時代区分に関して多くの議論がなされてきたが、今日では、新高ドイツ語標準語成立の過程に独立した初期新高ドイツ語の時代を置くことが一般的に認められている。しかしいづれにせよ、ドイツには、フランス、イギリスにおけるパリ、ロンドンのような標準語成立の中心となりうる圧倒的な政治的、経済的、文化的な力を持った地方が存在しなかったため、新高ドイツ語標準語成立にいたる過程は多元的で複雑にならざるを得なかった。初期新高ドイツ語は最初、多数の方言に分裂していたが、15世紀頃から皇帝庁、領邦諸侯、大都市の優勢な官庁の公用語（官庁語）に規範性を求めたいくつかの地域的共通語が生まれた。今日の一般的テーゼでは、これらの地域的共通語の多くが関与した言語平均化の現象が、後の新高ドイツ語標準語成立につながるのであるが、ここにおいて、特に積極的な役割を果たしたのが、ハプスブルク家の皇帝庁の官庁語を中心とした東上部ドイツ語と、ルターのドイツ語の基礎ともなったヴェティーン家のザクセン選帝候の官庁語を中心とした東中部ドイツ語であった⁴²⁾。そして何よりもこの言語平均化の現象はまず書法の分野において生じたことを確認しておく必要がある。

15世紀における初期新高ドイツ語の各言語地域とそこにおける書房の言語使用の実態は、一定の範囲内で W. Besch (1967, 1968)⁴³⁾にみるることができる。ここから gan, gen; stan, sten; kam, quam, kom に関する調査結果を表に整理してみると次のようになる。表における数字はその語形のあらわれる言語地域の数をあらわす。

	gan	gen	gan/gen
Westoberdeutsch	32	4	2
Ostoberdeutsch	1	6	2
Zentraloberdeutsch	0	9	0
Westmittelddeutsch	4	0	0
Ostmittelddeutsch	0	3	2
	stan	sten	stan/sten
Westoberdeutsch	29	2	7
Ostoberdeutsch	0	1	8
Zentraloberdeutsch	0	7	2
Westmittelddeutsch	4	0	0

中高ドイツ語の *gân, gên; stân, stên* の語形については、*gân, stân* 形が西上部、西中部地方のアレマン方言、ラインフランケン方言で、また *gên, stên* 形は東上部のバイエルン方言および中部ドイツ方言の広い範囲で優勢であったこと、押韻語としてはアレマン方言を中心とする *gân, stân* 形に *Prestige* をみることができるとをすでに確認した。15世紀の初期新高ドイツ語におけるこれらの語形も、西部方言で *gan, stan* 形が、東部、中部方言で *gen, sten* 形が優勢で、この点では中高ドイツ語と大きな相違はない。しかし東上部ドイツ語、東中部ドイツ語圏で両形併用の地域数の占める割合が多い点は、他の多くの単語にも共通するところであり、特に注目する必要がある。ルターも彼の書法に *gan, gen* の両形を併用した。しかし彼の後期における書法にはただ *gehen, gehn* 形だけが用いられ⁴⁴⁾、これが新高ドイツ語標準語に引き継がれることになる。*stan, sten* 形についても同様で、両形併用を経て新高ドイツ語には *stehen, stehn* 形だけが残ることになった。

	kam	quam	kom
Westoberdeutsch	34	0	3
Ostoberdeutsch	7	0	1
Zentraloberdeutsch	8	0	0
Westmitteldeutsch	1	3	0
Ostmitteldeutsch	1	3	0

中高ドイツ語では、*komen* の過去形はアレマン方言の *kam* 形、バイエルン方言、東部フランケン方言の *kom* 形、中部ドイツ方言の *quam* 形の3種類が見られた。しかし15世紀の初期新高ドイツ語ではこれらの語形の地域区分は大きく変化している。バイエルン、東部フランケン方言の *kom* 形は勢力を大きく後退させ、調査結果でも用例はわずかに4つの地域で見られるにすぎない。これに対して *kam* 形は広く浸透し、その結果上部の *kam* 形、中部の *quam* 形の図式となった。このような上部、中部をはっきりと二分する語形では、ルターは東上部ドイツ語を通じて上部ドイツ語形を選択した⁴⁵⁾。ここでもルターの *kam* 形が新高ドイツ語標準語で使用されることになる。

この他にも、中高ドイツ語の *gienc, gie; saget, seit* など短縮形、縮約形と完全形を併存させた変形、および *hæte* など *hân* の多様な過去形は、初期新高ドイツ語で、中部において優勢な *gienc, saget, hatte* の語形を浸透させた⁴⁶⁾。

すでに述べたように、標準語形成の中核となる強力な地域とその言語を持たなかったドイツ語は、新高ドイツ語標準語成立のためには、まず書法において、言語平均化の過程を経なければならなかった。ここにおいて、異なる地域語の組み合わせ、調整、さらに選択により言語平均化を促進し、標準語形成に至る一定の発展方向を確立したのは16世紀のルターであった⁴⁷⁾。そして、このルターの言語使用において重要な役割を果たしたのが東中部ドイツ語、そしてとりわけ東上部ドイツ語であった⁴⁸⁾。

ルター以前の15世紀においても、東上部ドイツ語および東中部ドイツ語圏の書房は、他の地域の言語に対してより柔軟に対応し、これを自分の書法にもより積極的に取り入れた。また東上部ドイツ語と東中部ドイツ語が書法において、相互に競合しあい、協調しあったことは今日の研究によって指摘されているところでもある⁴⁹⁾。したがって、ここにもルターにつながる言語発展の基本線を見ることができるといえる。

以上のような視点から、中高ドイツ語期の宮廷詩人たちの言語使用を、初期新高ドイツ語期の書房のそれと比較してみると、両者の間に基本的な連続性をみることができるといえる。シュタウフェン朝の宮廷詩人たちは、他の言語地域およびその言語の存在を強く意識し、これをそれぞれの言語使用に意図的に反映させた。言語に対するこのような基本姿勢は、ドイツ語史において、この時代に初めて明確に示されたものである。これがその後も言語平均化の過程で継承され、発展していくことになる。

(本稿は、平成5年度文部省科学研究費補助金一般研究C交付による研究成果の一部をまとめたものである)

註

- 1) Karl Müllenhoff/Wilhelm Scherer(Hrsg.): Denkmäler deutscher Poesie und Prosa aus dem VIII.-XII. Jh., Bd. 1, Vorrede zur 2. Aufl. [1863] (Neudr. Berlin 1964), S. XXVIII ff.
- 2) Konrad Burdach: Vom Mittelalter zur Reformation. Forschungen zur Geschichte der deutschen Bildung. Berlin 1893. In: Vorspiel, Halle/Saale (1925), S. 127-40.
- 3) Theodor Frings: Die Grundlagen des Meißenischen Deutsch. Dresden 1935. In: Sprache und Geschichte III., Halle (1956), S.11ff.
- 4) Frédéric Hartweg/Klaus-Peter Wegera: Frühneuhochdeutsch. Eine Einführung in die deutsche Sprache des Spätmittelalters und der frühen Neuzeit. Tübingen 1989, S. 38ff.
- 5) Peter von Polenz: Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Bd. 1. Einführung · Grundbegriff. Deutsch in der frühbürgerlichen Zeit. Berlin/New York 1991, S. 166ff.
- 6) Peter von Polenz: a. a. O., S. 79ff.
- 7) Stefan Sonderegger: Grundzüge deutscher Sprachgeschichte. Diachronie des Sprachsystems. Bd. 1. Einführung · Genealogie · Konstanten. Berlin/New York 1979, S. 217ff.
- 8) Jacob Grimm: Deutsche Grammatik I. (Reprografischer Nachdruck der 2. Ausgabe, Berlin 1870). Hrsg. von W. Scherer. Hildesheim 1967, S. XII.
- 9) Fritz Tschirch: Geschichte der deutschen Sprache, 2. Teil, 2. Aufl. Berlin 1975, S. 87.
- 10) Norbert Richard Wolf: Geschichte der deutschen Sprache. Bd. 1. Althochdeutsch-Mittelhochdeutsch. Heidelberg 1981, S. 179.
- 11) Stefan Sonderegger: a. a. O., S. 323f.; Peter von Polenz: a. a. O., S. 91f.
- 12) Adolf Bach: Geschichte der deutschen Sprache. 8. Aufl. Heidelberg 1965, S. 206f.; Norbert Richard Wolf: a. a. O., S. 180.
- 13) Toru Suzawa: Ausgrenzung von Dialektalem und Alttertümlichem? Zur Genese der höfischen Dichtersprache in der Stauferzeit. In: Göppinger Arbeiten zur Germanistik Nr. 583. Göppingen, S. 40ff. および、須沢通:「シュタウフェン朝時代の宮廷詩人語について」信州大学

人文学部, 人文科学論集第22号, 1988年, 111-119頁を参照。

- 14) Hartmann von Aue : Erec. Hrsg. von A. Leitzmann. 5. Aufl. besorgt von L. Wolff. Tübingen 1972.
- 15) Hartmann von Aue : Iwein. Hrsg. von G. F. Benecke u. K. Lachmann. 7. Aufl. neu bearb. von L. Wolff. Berlin 1968.
- 16) Gottfried von Straßburg : Tristan, nach dem Text von Friedrich Ranke, neu hrsg., ins Nhd. übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 2. durchgesehene Aufl. Stuttgart 1981.
- 17) Wolfram von Eschenbach : Parzival. 7. Ausg. von K. Lachmann, besorgt von E. Hartl. Berlin 1952.
- 18) Heinrich von Morungen : Lieder. Text, Übersetzung, Kommentar von Helmut Tervooren. Stuttgart 1978.
- 19) Des Minnesangs Frühling. Nach K. Lachmann/M. Haupt/F. Vogt/C. v. Kraus, bearb. von Hugo Moser/Helmut Tervooren. I. Text. Stuttgart 1977, S. 285ff.
- 20) Die Gedichte Walters von der Vogelweide. Hrsg. von K. Lachmann. 13., aufgrund der 10. von Carl von Kraus bearb. Ausg. neu hrsg. v. Hugo Kuhn. Berlin 1965.
- 21) Edmund Wießner/Hanns Fischer(Hrsg.) : Die Lieder Neidharts. 4. Aufl. Tübingen 1984.
- 22) Konrad von Würzburg : Kleinere Dichtungen II. Hrsg. von Edward Schröder mit einem Nachwort von L. Wolff. 4. Aufl. 1968, S. 42ff.
- 23) Ebd., S. 1ff.
- 24) Konrad von Würzburg : Engelhard. Hrsg. von Ingo Reiffenstein. 3., neubearb. Aufl. der Ausgabe von Paul Gereke. Tübingen 1982.
- 25) Konrad von Würzburg : Kleinere Dichtungen I. Hrsg. von Edward Schröder mit einem Nachwort von L. Wolff. 10. Aufl. 1970, S. 41ff.
- 26) Konrad von Würzburg : Pantaleon. Begründet von H. Paul. Fortgeführt von G. Baesecke. Hrsg. von Hugo Kuhn. Tübingen 1974.
- 27) Paul/Moser/Schröbler/Grosse : Mittelhochdeutsche Grammatik. 22. durchgesehene Aufl. Tübingen 1982, S. 221.
- 28) Ebd., S. 200.
- 29) Ebd., S. 227f.
- 30) Ebd., S. 222.
- 31) Ebd., S. 226f.
- 32) Ebd., S. 102ff. u. S. 225f.
- 33) Ebd., S. 103.
- 34) Heinrich von Veldeke : Eneasroman. Nach dem Text von Ludwig Ettmüller ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Dieter Kartschoke. Stuttgart 1986.
- 35) Norbert Richard Wolf : a. a. O., S. 184f. ; Christopher J. Wells : Deutsch : eine Sprachgeschichte bis 1945. Aus dem Englischen von Rainhild Wells. Tübingen 1990, S. 128.
- 36) 須沢通 : 「Eneit における押韻の方言的特徴について」 信州大学人文学部, 人文科学論集第26号, 1992年, 93-103頁参照。
- 37) R. E. Keller : Die Deutsche Sprache und ihre historische Entwicklung. Bearb. und übertragen aus dem Englischen, mit einem Begleitwort sowie einem Glossar versehen von

Karl-Heinz Mulagk. Hamburg 1986, S. 260f.; Gabriele Schieb/Günter Kramer/Elisabeth Mager: Henric van Veldeken. Eneide III. Wörterbuch. Berlin 1970.

- 38) Ebd.
- 39) Ebd.
- 40) Ebd.
- 41) Wilhelm Scherer: Zur Geschichte der deutschen Sprache (1868). 2. Aufl. Berlin 1878.
- 42) Frédéric Hartweg/Kraus-Peter Wegera: a. a. O., S. 44ff.; Peter von Polenz: a. a. O., S. 100f. u. S. 160ff.
- 43) Werner Besch: Sprachlandschaften und Sprachausgleich im 15. Jahrhundert. Studien zur Erforschung der spätmittelhochdeutschen Schreibdialekte und zur Entstehung der neuhochdeutschen Schriftsprache. München 1967.; Werner Besch: Zur Entstehung der neuhochdeutschen Schriftsprache. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 87. 1968, S. 405ff.
- 44) Werner Besch: Sprachlandschaften und Sprachausgleich im 15. Jahrhundert, a. a. O., S. 84.
- 45) Werner Besch: Zur Entstehung der neuhochdeutschen Schriftsprache, a. a. O., S. 420 u. S. 423.
- 46) Klaus-Peter Wegera: Morphologie des Frühneuhochdeutschen. In: Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung. Hrsg. von W. Besch/O. Reichmann/S. Sonderegger. 2. Halbband. Berlin/New York 1985, S. 1319.; R. E. Keller: a. a. O., S. 377.
- 47) Werner Besch: Zur Entstehung der neuhochdeutschen Schriftsprache, a. a. O., S. 425.
- 48) Ebd., S. 426.
- 49) Peter von Polenz: a. a. O., S. 166ff.; R. E. Keller: a. a. O., S. 360ff.